Japanese Association of Educational Psychology

The Annual Report of Educational Psychology in Japan
2007, Vol. 46, 16-18

準備委員会企画シンポジウム　3

学生は質的心理学の教育から何を得るか

企画者　田中共子（岡山大学）
司会者　下山晴彦（東京大学）
話題提供者　伊藤哲司（茨城大学）
能智正博（東京大学）
岡本依子（湘北短期大学）
田中共子（岡山大学）
指定討論者　村本由紀子（横浜国立大学）
箕浦康子（お茶の水女子大学）

企画の趣旨

質的心理学の教育が携えている教育効果について，心理学の基本的な研究指導のみならず，応用的分野における訓練や指導，心理学以外を専攻する学生の教育も視野に入れ，自らの教育実践の経験に基づいて語り合う場を設けた。従来の「量」に加えて「質」的手法を取り入れると，学生にはどんな利点が生じるのか。質的心理学の導入によって，何らかのパラダイムシフトは生じるのか。心理学教育の中に，質と量をどう位置づけるのか。メンバーとしては，学部生向けの質的心理学のテキスト『動きながら識る，関わりながら考える—心理学における質的研究の実践』(ナカニシヤ出版, 2005年) をともに作った関係者にお集まり願った。

心理学を学ぶ初期段階において質的研究を体験することの効能

伊藤　哲司

「地図を持って街に出よう！」という課題から始まる実習(心理学専攻2年生の必修)をスライドで紹介し，フィールドワークを主とした質的研究を体験する効能を，学生のレポートや発表やコメントから探った。フィールドワークは講義だけでは身に付かず，体験を通じて理解が進む。学生たちは身近な街を「フィールド」と見なして，街の人たちの声に耳を傾け始めたとき，新鮮な発見を体感していく。それは心という「内」に向かいがちだった関心を，「外」へと転換させる契機となる。自分の心を知るためにも他者と出会っていく必要があることに気づく。それがライフスタイルの見直しにつながり，自分もなじみの店を作りたい，などと感じ始め，自分が変わるきっかけになる。いわばリハビリ的な機能が生じている。学生たちは多くの人に話を聞く体験から，対話の重要性に気づいていく。臨床心理への直線的な関心しかなかった学生が，回り道の意味をかみしめ始める。こうして，実習を通じて学生は「柔らかく響く体」へと変化を遂げていく。

心理臨床家の教育と質的研究

能智　正博

臨床心理士養成の大学院で，科学者の目と実践者の目を持つ，「サイエンティスト・プラクティショナー」の養成を目指している。臨床実践の心構えと質的心理学研究の技能は，柔軟性や能動性を初めとして，実は対応するところが多い。グラウンデッドセオリーの絶えざる仮説生成と修正は，臨床実践でケースに応じた仮説を作成しようとする営みと重なる。クライアントと臨床家との関係を考慮しながら語りを理解することも，ナラティブ分析の視点と重なり合う。授業では，「ライフストーリーを書く」課題を出している。自分ならこう言わないとか他と食い違うとか，「気になる」部分に出会ったところで立ち止まってもらう。「よく分からない」ことが認識できるのは，人間の特権ともいわれる。曖昧さに耐えながら，対象への関心を持続して問いを深めていってもらう。これは臨床家に望まれる態度と，まさに共通する。社会や文化のマクロ要因も含めた，複雑な網の目とともに対象を理解する質的研究の視点も，近年の心理臨床におけるコンサルテーション活動と通じる。

保育者養成の短大学生は質的心理学の教育から何を得るか

岡本　依子

保育者（保育士と幼稚園教諭）を養成する短期大学では，卒業後直ちに現場に立つため，実践重視のカリキュラムが組まれている。「講義系」と「表現系」科目に分かれ，後者に関心が集まりやすいが，心理学は前者だ。学生の「興味関心を言語化」することを主たる目標に据えて，研究という形式に触れておくことや，保育や発達への意識を高めることも促す。目の前の現象をストーリー化して理解して欲しいと願っている。理論的知識と実践をどう結びつけるかでつまずく例が多い。学生には，写真からの読み取り練習，家庭を訪問しての親子の関わり調査，子どもの散歩への同伴体験，おもちゃ屋での迷子調査な

NII-Electronic Library Service